

大学院派遣研修報告書

所属校	東京都立足立東高等学校	氏名	残間 紀美子
派遣大学院	早稲田大学大学院	専攻・コース	教育学研究科 英語教育専攻
研究テーマ	Contribution of Phonetic Information to the Formation of Chunks for Japanese Learners of English ～phonetic information as a means to facilitate learning English in classrooms～ 日本人英語学習者に対する音韻情報の付与がチャンク形成に及ぼす寄与について ～英語学習促進の手段としての音声情報付与～		

I 研究の概要

人がいかにして第2言語・外国語を学ぶのかということを追求する第2言語習得研究は、近年、多様な発展を遂げており、それに伴いその成果が言語教育の場に生かされ、様々な学習論や指導法の研究が行われている。しかしながら、音声領域、特に言語学習を音声の視点からとらえた学習論についてはあまり論議がなされていない。日本の英語教育においても、音声指導の効果については明らかにされておらず、その概念は不定であり、教授法についても統一性は見られずに、教師各々の裁量にゆだねられている現状にある。

音読指導の際に、語単位を超えたまとまりのある英語を発話する際の語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を付与することが学習者の言語情報処理単位（チャンク）の形成に及ぼす影響を調査し、「学習者に語と語のつながりに関する音声情報を与えることが処理単位の形成を促す。」という仮説に基づいて日本人英語学習者（高校2・3年生）60人を対象に情報処理単位形成における音声情報の有効性を検証した予備実験（2004年度実施）の成果を踏まえ、本研究では、音声情報へのattentionという視点を加え、更に難易度の高い文法項目を含むチャンクを習得項目とした調査を日本人英語学習者（高校1・2・3年生）220名に対して実施した。

テスト結果の分析、及びアンケート調査の結果に基づき、音声情報を学習者に付与することの有効性について、また学習者、特に英語学習を苦手とする学習者に対する音声情報の与え方について、学習者の学習方略をも踏まえた視点から考察を行った。

1 研究目的

「日本人学習者に、ネイティブ・スピーカーが英語を発話する際に起こるある種の音声情報（具体的には同化、脱落、子音と母音とのつながり、シュワや弱形など）を与え、指導をすることが、学習者の認知処理におけるチャンキング作用を促すことに貢献し、結果として教室での英語学習に効果をもたらす」という仮説を実証する。

2 研究根拠

- (1) 言語学習を認知的視点からとらえた場合、「記憶」が学習を支える根幹となり、そのメカニズムにはチャンキング作用が重要な役割を果たしている。
- (2) ネイティブ・スピーカーが自然な状況で発話をする際に、意味のある語のまとまりにおいて必ず音の崩れが起こる。
- (3) 音の崩れが起こるのは「意味のある語のつながり」においてであり、それはまさに記憶のメカニズムにおける「チャンク」と一致する。

以上の事実から、「チャンク→音の崩れ」という図式の逆、つまり「チャンク←音の崩れ（音の崩れを学習者に教えることがチャンクの形成に貢献する）」という仮説を設定した。

3 研究方法

(1) パイロットスタディー

- ① 対象 公立高等学校 1・2・3 年生 66 名
- ② 実施時期 平成 16 年 9 月～平成 17 年 3 月
- ③ 方法 「一般動詞の疑問文・否定文」について各群で実験を実施した。
 - ア 統制群 (33 名)
 - ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を一切付与しない。
 - ・事後テスト
 - ・追テスト
 - イ 実験群 (33 名)
 - ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 解説を与え、学習者に語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を意識させた上で、発音練習をさせる。
 - ・事後テスト
 - ・追テスト

事前テスト、事後テスト及び追テストの結果を統計処理し、分析を実施した結果、「学習者に語と語のつながりに関する音声情報を与えることが処理単位の形成を促し、かつその効果は持続する」という仮説を立証できる結果が得られた。

(2) 本調査・研究

実験①

- ① 対象 公立高等学校 1・2・3 年生 119 名
- ② 実施時期 平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月
- ③ 方法 「一般動詞の疑問文・否定文」について各群で実験を実施した。

- ア 統制群 (42名)
- ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を一切付与しない (モデル音声にも音の崩れを含まない。)
 - ・事後テスト
 - ・追テスト
- イ 実験群 1 (36名)
- ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 解説を与え、学習者に語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を意識させた上で、音の崩れを含んだモデル音声を与え、発音練習をさせる。
 - ・事後テスト
 - ・追テスト
- ウ 実験群 2 (41名)
- ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 解説を与えず、学習者に語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を意識させずに、音の崩れを含んだモデル音声を与え、発音練習をさせる。
 - ・事後テスト
 - ・追テスト

事前テスト、事後テスト及び追テストの結果を統計処理し、分析、考察を行った。

実験②

- ① 対象 公立高等学校 1・2・3 年生 102 名
- ② 実施時期 平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月
- ③ 方法 「現在完了形の疑問文・否定文」について各群で実験を実施した。
- ア 統制群 (35名)
- ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を一切付与しない (モデル音声にも音の崩れを含まない。)
 - ・事後テスト
 - ・追テスト
- イ 実験群 1 (34名)
- ・事前テスト
 - ・target sentences の発音練習
 - * 解説を与え、学習者に語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を意識させた上で、音の崩れを含んだモデル音声を与え、発音練習をさせる。
 - ・事後テスト
 - ・追テスト

ウ 実験群 2 (33名)

- ・事前テスト
- ・target sentences の発音練習

* 解説を与えず、学習者に語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を意識させずに、音の崩れを含んだモデル音声を与え、発音練習をさせる。

- ・事後テスト
- ・追テスト

事前テスト、事後テスト及び追テストの結果を統計処理し、分析、考察を行った。

- ④ 結果 「日本人学習者に、ネイティブ・スピーカーが英語を発話する際起こるある種の音声情報を与えることは、学習者の認知処理におけるチャンキング作用を促すことに貢献し、結果として教室での英語学習を促進する」という本研究における仮説を肯定できる結果を得られた。

4 研究成果

研究結果から、英語教授法、特に Classroom English における音声指導のもつ大きな可能性を示唆することができる。従来、英語教育の現場において、語単位を超えたまとまりのある英語を発話する際の、語と語の間の音のつながり、音の崩れといった音声情報を学習者に付与することは、リスニング能力向上の効果を狙ってその指導がなされている場合がほとんどであるが、本研究では、音声情報の付与が単にリスニング能力を向上させるにとどまらず、学習者の情報処理単位に影響を及ぼし、総合的な英語運用能力に寄与するという結果を提示することができた。この結果は、授業の中に音声に関する指導を適切な形で導入することによって生徒の英語学習に大きく貢献できる可能性を示すものである。

また、研究の過程で学習者の「学習スタイル」・「学習方略」は、個人によって大きな差があり、教授対象となる生徒集団の「学習スタイル」・「学習方略」を理解、考慮することが、学習の成否に大きくかかわることが判明した。我々教員は指導者として常に生徒の学習スタイルを理解した上で学習指導を行うということの重要性を改めて認識することができた。

II 学校等における研修成果の活用計画

本研究の成果は、音声情報の付与が単にリスニング能力を向上させるにとどまらず、学習者の情報処理単位に影響を及ぼし、総合的な英語運用能力に寄与するという結果を提示することができたことである。この結果に基づき、授業の中に音声に関する指導を適切な形で導入することによって生徒の英語学習に大きく貢献できると考えている。今後は研究成果を授業実践につなげ、指導方法を確立すべく更に研さんを重ねる所存である。また、研究の過程で明らかになった学習者の「学習スタイル」・「学習方略」に関する情報は、校内での研修等の機を得て他の先生方と共有し、学校全体の教授方法に対する意識の高揚を図りたい。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	東京都立足立東高等学校	氏 名	残間紀美子
派遣大学院	早稲田大学大学院	専攻・コース	教育学研究科 英語教育専攻
研究主題	「Contribution of phonetic information to the formation of chunks for Japanese learners of English」		
1 所属校での成果活用	<p>大学院派遣研修の大きな目的は「平成15年度よりエンカレッジスクールとしてスタートした現任校における実情に照らし、学力不振、特に英語学習に対して拒絶反応を示す生徒達への英語学習に対する動機付け、及び英語科指導における新たな方法論の研究に取り組むこと」であり、特に本研究においては、音声情報の付与が単にリスニング能力を向上させるにとどまらず、学習者の情報処理単位に影響を及ぼし、総合的な英語運用能力に寄与するという結果を提示することができた。この結果は、授業の中に音声に関する指導を適切な形で導入することによって生徒の英語学習に大きく貢献できる可能性を示すものである。学力不振生徒の学習スタイルを分析し、音声情報による指導を行うことによって、学習者に英語学習に対する心理的負担を与えることなく学習効果を上げる教授方法を検証することができたと考えている。また、研究の過程で学習者の「学習スタイル」・「学習方略」は、個人によって大きな差があり、教授対象となる生徒集団の「学習スタイル」・「学習方略」を理解、考慮することが、学習の成否に大きく関わることが判明した。この研究結果に基づき、本校生徒の学習スタイル・学習方略に合わせ、音声情報及び視覚的情報効果を最大限に活用した授業実践を実施している。具体的には、「音読の徹底」・「Audio Visual 機器及び LL 機器の活用」・「ビデオや DVD を活用した教材の開発」の3つを大きな柱としている。この授業実践の効果に関しては今年度末にデータ分析を行う予定である。</p> <p>また、自己の研究テーマ以外にも「発音指導」・「Task Based Learning の手法」・「ディベート指導」・「英語プレゼンテーション指導」・「リーディング指導」・「ライティング指導」・「スピーキング指導」・「Distance Learning の手法」・「e-ラーニングの手法」等、最新の英語教育理論に基づく指導の手法を学んだが、それらを有機的に統合させ、授業を組み立てる工夫をしている。</p> <p>また、英語教育以外にも「学校経営」・「発達心理学的知見に根ざした生徒指導、生活指導、教育相談の在り方とその手法」・「キャリア・ガイダンスの在り方とその手法」・「ニートと社会構造に関する国際的知見および教育現場の具体的な関わり方について」・「死生観に関わる教育」・「情報教育とプレゼンテーション技能」・「学校健康教育」等、国や東京都の教育施策の企画・立案に携わっている教授陣から受けた薫陶を、校内の組織づくり及び日々の教育実践に生かす努力をしている。</p> <p>さらに研究の過程で深く関わった統計に係わる理論や技法を様々な場面で用いることによって、客観化することが難しい教育活動の成果を数値化し、説得力を持った分析や論理展開につなげている。</p>		
2 委員会・研修会での活用	<p>校内全体に対しては、17年度末「本校生徒の学習方略の特徴について～英語授業の視点から～」という主題で研修会を行い、研究の概要を報告するとともに研究の過程で明らかになった本校生徒の「学習スタイル」・「学習方略」に関する情報を他の先生方と共有した。我々教員が指導者として常に生徒の学習スタイルを理解した上で学習指導を行うということの重要性を促し、学校全体の教授方法に対する意識の高揚を図る一助とした。</p> <p>また、大学院研修で培った最新の学校経営の在り方やその手法、及び情報活用・プレゼンテーション技能の活用等を募集対策委員会の活動に生かし、効果を上げている。</p> <p>更に本校では、国際交流委員会を中心に国際交流活動を推進しているが、大学院派遣研修で自らも体験した自文化理解に基づく異文化理解、国際交流の手法を、教育実践として役立てている。</p>		

<p>3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>大学院派遣での研究成果をふまえ、今年度の自己の課題として以下の3点を設定し、本校生徒の学習方略に沿った授業を実施している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教科に対する苦手意識の払拭を図る授業実践 2. モティベーションを高め、かつ個々の学力に応じた課題設定、課題解決ができる教材の提示 3. 生徒が個々のつまずきや課題を自ら発見し、課題解決に対する意識を明確に持てるような評価の工夫 <p>自己の課題解決を目標とし、今年度既に2回の研究授業を実施している。詳細は以下の通り。</p> <p>第1回： 日 時 平成18年6月26日（月） C時限（10：05～10：35） 対 象 第1学年5・6組 月組（習熟度別4展開編成中上位2番目）18名 科 目 英語I 指導目標 日常のかつ基礎的な語彙や構文を、絵本における具体的な言語使用の中で確認し、理解する。さらに翻訳作業を通じて、聞いたり読んだりして得たイメージを自らの言葉で表現する力を養う。また、LL機器やAudio-Visual教材の使用により生徒の英語学習へのモチベーションを高め、総合的な言語活動の場を設定する。</p> <p>第2回： 日 時 平成18年9月11日（月） 6時限（14：20～15：10） 対 象 第2学年5・6組 花組（習熟度別4展開編成中最上位）16名 科 目 英語II 指導目標 難易度が高いとされる「仮定法」「過去完了形」等の構文を、絵本における具体的な言語使用の中で確認、理解し、また翻訳作業を通じて聞いたり読んだりして得たイメージを自らの言葉で表現する力を養う。その際、LL機器やAudio-Visual教材の使用により生徒の英語学習へのモチベーションを高め、総合的な言語活動に親しませる。</p> <p>更に1月下旬～2月の間に研究授業を実施する予定である。</p>
<p>4 今後の活用計画等</p>	<p>今後の所属校での成果活用予定としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IT機能を活用した学校設定科目「体験I」及び「体験II」における多言語、異文化体験プログラムの計画を立案し、実施する。 ・ビデオメール及びTV会議システムやチャット機能を用いた国際交流プログラムの計画を立案し実施する。 ・研究成果に基づいた授業実践の効果に関するデータを分析し、その結果についての考察を行い、校内研修で報告する。 ・大学院派遣で学んだ教科指導及び生徒指導の実践に関する具体的な手法等を伝達講習およびOJTにより初任教員をはじめ後進に伝えることによって、その育成に役立てる。 ・現在、非常に速い速度で展開しつつある教育施策に関して、大学院派遣によって得た「今、実施されつつある」或いは「今後現実となるであろう」教育に関する様々な情報を他の先生方と共有し、先見性を持って教育活動に携わることによって、足立東高校をエンカレッジスクールとして更に発展させる原動力の一助とする。 <p>また、大学院派遣によって学んだアカデミック・リーディングや高度なライティング、チュートリアルシステム、スピーキングなどの指導方法、及び図書館ネットワークシステムを利用した調べ学習の手法など、新たな教育システムを開発する際、あるいは現在の所属校の生徒とは違った学習方略や学習スタイルを持つ生徒を指導する際には是非活用してみたい。</p> <p>大学院派遣で得た多くの知識と経験、及び教育に携わり第一線で活躍されている方々とのネットワークを東京都の教育全体の質の向上に役立てるため、更なる研鑽を積む所存である。</p>